

政治的リテラシーを育む教育に関する研究 —イギリスのシティズンシップ教育の検討を通して—

学校教育専攻
発達臨床コース
尾形俊輔

1. 問題と目的

近年、青少年の社会への無関心や規範意識の低下などが問題視されている。2003年の中央教育審議会答申は、公共心の希薄さ改善のためボランティア活動をあげ、奉仕精神や社会規範尊重の態度を育てる必要があると述べている。しかし、小玉(2003)は、日本の教育改革論議は共同体への奉仕をもっぱら強調し、「市民が国家の意思決定に参加し、そこで政治的判断力を行使する側面が軽視されている¹⁾と批判している。さらに、広田(2009)は現代政治の読みにくさ、国民の政治離れや青少年の社会化の問題をあげ、政治的教養を身につけさせる教育を今こそ実現化すべきであると述べている²⁾。他方、イギリスではシティズンシップ教育が必修化された。シティズンシップ教育では小玉らが主張する政治的側面が、政治的リテラシーとして重視されている。では、イギリスが日本と異なって政治的リテラシーを重視するのはどのような経緯からであろうか。また、そもそもシティズンシップや政治的リテラシーとはどのようなものだろうか。

そこで本研究では、イギリスで政治的リテラシーが重視されることになった経緯を明らかにするために、必修化された際の報告書(通称クリックレポート)を検討する。また、シティズンシップや政治的リテラシーとは何か、両者はどのように関係するのか、どんな教育が想定されているかを明らかにするために、現在イギリ

スのナショナルカリキュラムやクリックレポート、シティズンシップ教育の第一人者であるバーナード・クリックの考えを中心に検討する。

2. 本研究の構成

序章 本研究の目的と方法

第1章 イギリスのシティズンシップ教育

第2章 シティズンシップ教育導入の変遷と

必修化の背景

第3章 政治的リテラシーとシティズンシップ

終章 本研究の結論と考察

3. 本研究の概要

第1章ではナショナルカリキュラムにおける教科「シティズンシップ」の規定と、中等教育修了資格試験(以下 GCSE)の内容を検討した。「シティズンシップ」の教育内容は①政治的権利や人権、市民の責任、②法律・裁判システム・メディア・公的資金の運用・紛争を解決する方策、③国内外の多様な価値観の3つの領域から構成されていた。授業方法として、論争的な問題についての討論、コミュニティー活動への参加を通して知識・理解・スキルを身につけることが想定されていた。批判的な考え方や、説得力のある弁論や表現といった能力を向上させる機会を与え、また学校以外での活動に、計画・反省を伴った、責任を持って参加することが示されていた。評価ではペーパーテストよりも活動を通じた評価が大きな比率を占めており、社会問題を見つけ、批判的に考えて改善していく姿勢や、他人とのコミュニケーション能力が評価

される仕組みになっていることがわかった。

第2章では先攻研究を中心にイギリスのシティズンシップ教育の変遷を概観し、クリックレポートにおける必修化の背景を検討した。その結果、シティズンシップ教育は若者たちの政治的無関心・反社会的態度やナショナルアイデンティティーの再構築を背景として提案されたことが明らかになった。

第3章ではクリックレポートにおけるシティズンシップとクリックの考える政治的リテラシーを比較検討し、さらに現在の教科「シティズンシップ」との関連性を検討した。

クリックの考える政治的リテラシーとは、①社会問題を解決するための知識・理解、②社会の多元性の認識、③活動への積極性・論理的主張・協調性といったコミュニケーションスキル、④他者へ配慮し、現状を批判的に思考する、和解的な問題解決の態度から成り立っていた。クリックレポート中のシティズンシップ教育は、この4つの領域を反映し、学校現場で取り入れるために具体性・段階性を持たせていた。

クリック、クリックレポートともに授業方法として論争的な問題を提案した。学校や教師の役割は、特定の価値観を伝えることではなく、存在する多様な価値観を、どう和解的に実現できるか、熟考する機会を設けることであった。また、ボランティア活動やコミュニティー参加そのものが目的ではなく、活動を通して知識・理解・スキルを獲得することが目的を認識すべきだとされていた。

クリックやクリックレポートでの政治的リテラシーを育む教育は、現在の教科「シティズンシップ」にはほぼ反映されていた。しかし、初等教育段階での「シティズンシップ」は必修ではない。和解的な解決を目指す態度を初期の段階で身につけさせようとする教育構造があるが、

この領域は必修化されていないのである。

本研究の結論は以下の2点まとめられる。①シティズンシップや政治的リテラシーを重要視することには、若者の政治的無関心や反社会的態度、また、ナショナルアイデンティティーの再構築という背景があった。②クリックの考える政治的リテラシーとは、社会問題の知識・理解、社会の多元性の認識、コミュニケーションスキル、和解的な問題解決態度からなり、現在のシティズンシップとほぼ同義であった。

このことから、政治的なリテラシーと若者の政治的無関心や反社会的態度の改善が結びついていることを示唆した。また、奉仕の精神や社会規範尊重の態度とシティズンシップ教育を結びつけて認識することは誤であると示唆した。

4. 今後の課題

第1に、イギリスでの実践事例と試験の実態を検討し、学校や教師にどのような変化が起きているのかの確認。第2に、イギリス以外の国でのシティズンシップ教育の内容と背景の検討。第3に、日本での市民性教育の実態を検討することで、日本でシティズンシップや政治的リテラシーを育むためのさらなる成果を得られるだろう。

<引用文献>

- 1 小玉重夫(2003), 『シティズンシップの教育思想』, 白澤社, P. 109
- 2 広田照幸(2009), 『格差・秩序不安と教育』, pp300-301

指導 藤田 武志